

～ セピア色の風景 ～

「山仕事」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

わが家では、遠いところだが薪(まき)取りのための山を持っていた。雑木林の山で、それを伐採して家で使う薪にしつつ、伐採後の斜面には杉を植林していった。

山の登り口の両脇には、既に並木状に杉が植えられており、祖父より繰り返し言われたものだった。

「しげお、これはしげおのために植えたんだから、所帯を持って家を建てるとき持っていて、製板して使え。ぢぢちゃんとはつくにいねえべども(とうに亡くなっているだろうけれども)」と。

また、なぜか少年しげおはその山仕事が好きだった。さすがに夏場の下草刈り(植林した杉が順調に育つように、幼木の間絡まるつるや背の高い草木を刈ること)時は、体力がないのと、蝮(まむし)

などが出るため、連れていってもらえなかった。しかし秋には、喜々としてついていったものだった。

秋の山仕事では、木を伐採する時、まず根元の谷側を半分弱切り、その後山側を切る(その逆だと、谷側を切っている間に木が傾き、このぎりが動かなくなり、これを『このぎりが食われる』というが、これは非常に危険)や、倒す場所を意図的に変える場合は、伐採に入る前に幹の上部にロープを縛り、張っておくこと、などを自然に覚えた。

落葉の時期は、沢筋に大量にたまった落ち葉の池に入り込み、首をようやく出せるくらい自ら埋まって遊び、喉が渴いては沢水を飲み、遊び疲れては枯れ葉を敷き布団と掛け布団にして眠った。

夢中になって山遊びするときはあつという間なのに、時間がゆつたりと流れていた時代だった。



相馬地方の山並み。鹿狼山(左)と五社壇(右)

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める